

## リスクの理解と限定合理性

同志社大学 心理学部 中谷内一也

リスク概念を用いた安全管理の特徴として定量性があげられる。対象をクロ（有害）かシロ（無害）かと二分法で判断するのではなく、いわば灰色の濃さを評価しようとする。また、対象の灰色が濃くても、そのことだけで社会から排除すべきとはならない。もたらされるベネフィットが大きければ受容が正当化されうるし、逆に、ベネフィットがわずかしかなければ、リスクが小さくても根絶すべきという判断もありうる。さらに、あるリスクを削減することで別のリスクが増大する場合は、そのリスク削減は控えたほうが得策ということもある。すなわち、リスク概念を用いた安全管理は、(1)定量的な評価、(2)トレードオフを考慮した総合的判断、を構成要素とし、それらを実現するには高い認知負荷が必要となる。

ところで、様々な心理学理論の基盤のひとつに、限定合理性(Simon, 1956)という考え方がある。これは、「人の情報処理能力は限定的であり、そのために複雑な世界を単純化し、低い負荷で理解しようとする」というものであり、人々のリスク認知を説明する多くのモデルもこの考えに根ざしている。これまでリスク認知研究は、人々の直感が対象を善か悪かに分極しがちであり、視野が狭いことを明らかにしてきた。そして、これらは上述したリスク論的な安全管理に求められる思考法と折り合いが悪い。

もし、人々が「直観的なリスク認知に基づくよりも、精緻な思考によってリスクを評価し、管理すべきである」と合意するなら、リスク認知に関する教育の方向性は自ずと定まってくる。それは定量的で、トレードオフを考慮し、総合的な視野に立ってリスクを捉えようとする姿勢や能力を育む教育となる。そのためには、放っておくと私たちはどのような直感的リスク判断をしがちなのかについて理解すること、すなわち己を知ることも、教育の一環として必要である。

こういった教育の方向性は、直感的なリスク認知の欠点を強調するが、かといって、精緻な思考によるリスク評価が万能であると信じ込ませるものではない。むしろ、不確実性を評価するリスク評価そのものに不確実性があること、現時点で利用可能なデータやモデルで最善を尽くしても将来予測には幅があり、現実がその幅に落ちないことも珍しくないこと、つまり、「リスク評価の限界」を理解することも教育目標として重要であろう。